

鈴木義廣君を偲んで

宿澤 修

鈴木君の存在を初めて知ったのは、ぼくが小学校で一緒だった可愛くて素敵な S.E.さんという女生徒と甲府一高構内で 2 人連れ添っている姿を見かけたときだった。その後も何遍か目撃したが、硬派を標榜していたぼくとしては、当時の鈴木君のことは単なる軟派のチャラ男くん、と無視し特に印象に残る存在ではなかった。

ところが 3 年生になると何と鈴木君と同じクラスでその上彼の席がぼくの直ぐ後ろということになり、あの人なつつこい対応にすっかり打ち解けて 4 組のクラスメートではほとんど唯一の話し相手となった。

当時のぼくは玉突きとマジックにどっぷり浸かり大学受験などどこ吹く風で授業はサボり放題、出席しても居眠りばかりとまったくもってデタラメな高校生活を送っていた。今にして思えばぼく自身も鈴木君とはタイプこそ違え世の中を甘く見ているという点では鈴木君に負けず劣らずのチャラ男であった。この一文を読んでいる 4 組の諸兄姉は多分異口同音にそもそも「シュクザワ」なんて同級生が居たかな、などとおもっているのではないのだろうか。

不運にもぼくの直ぐ後ろの席になってしまった鈴木君は、こんなぼくの教室での一部始終を否応なく目撃するはめになってしまい、そうとう呆れていたことと思うが、卒業後の鈴木君は彼の知り合いにぼくを紹介するとき、決まって当時のこの状況を説明し、しかも何か誇らしげに話すのが常であった。こんなことから少なくともぼくの当時の学校での素行を、ことの是非はともかく、彼は軽蔑することなくむしろ好意的に受け入れていてくれたんだ、とうかがい知ることができるのであった。

20 年ほど前に、鈴木君は母親の介護を兼ねて甲府市池田に「すずき歯科クリニック」を開院し甲府へ戻ってきた。30 年振りの再会であった。お互いに見た目の変貌は少なからずあったもののともに近い世界観をもったチャラ男くんぶりについては変わっておらず、一気に交情を深めることになった。

そして付き合い程に彼が歯科医師としていかに優れているかを知ることになるのであった。卓抜した技量に加えて理論的背景も盤石で、どんな質問にも明快かつ的確に答えてくれるのであった。また、その取り組みの姿勢も瞠目に値し、国内にエイズが広がってきたころ、ほとんどの歯科医院では手術用の手袋を装着するようになったのだが、彼は手袋なんかしては良い仕事はできないと言って素手を通した。彼の天職としての歯科医魂を見たような気がした。また、人を頼ってやっとな鈴木先生のところまでたどり着いたと言って、遠く県外から通院していた患者も何人かいた。こんなところからも鈴木君が歯科医としていかに優れた名医であったかがうかがえる。

10 年ほど前から、鈴木君の声掛けで高校同期の友人の命日に故人をよく知る友人 4 人で墓

参に行き、その帰りに昼食を一緒にとるとというのがここ何年かの変わらぬ年間行事の一つになっていた。一昨年の7月15日のことである。墓参の帰りの昼食時に、鈴木君は鬼籍に入った同期の友人の多さに驚くとともに、「これから毎年墓参の回数が増えるばかりだな、まっ、しょうがねえな、最後はおれがみんなの面倒をみてやるからな」と言いながらカツ定食をペロリと平らげた。ここのところ少々頑固な咳が続いてはいたものの、傍目には元気そのものであった。よもや、それから一ヶ月半後にステージ4の末期の胃がんの告知を受けようとは夢想だにできなかった。そして、誰よりも鈴木君本人が一番驚き、受け入れ難かったに相違ない。

こうして闘病生活が始まったのだが、鈴木君は落ち込む間もなくがん克服に向かって動き出した。すると初めに用いた抗がん剤が劇的に効き、転移していた肝臓のがんが8割がた縮小、このまま消失するのではないかと思えるほどであった。希望の光が見えたようだった。しかし、残酷にも4、5か月後がんは再び急速に増大し始めた。

随分以前のことであるが、ぼくが入院したときに鈴木君が見舞いに来てくれたことがあり、ぼくの顔を見るなり「シュク、何やってんだ。病気なんか根性で治すんだ。根性で」と呵々と笑い飛ばす鈴木君が炸裂。手術直後のぼくとしてはさすがに驚き、なんて奴だなどとおもったものだが、もちろんこれは彼特有の愛情表現であり励ましであった。実は最近、ふとそんなことを思い出し、そういえば鈴木君の初めに用いた抗がん剤が劇的に効き、がんが一気に縮小したのはひょっとしたら抗がん剤の効果というより彼が口癖のように言っていた「根性」でがんを抗った結果ではなかったのだろうか、そんな気がしてきたのだ。彼のいう「根性」は案外彼自身本気で信じていて、しかも彼の根性は本物だったのかもしれない。それゆえあそこまで延命したのではないのだろうか。あの生きようとする鈴木君の精神力、生命力は洵に凄まじく最後のさいごまで刀折れ矢尽きるまでがんと闘い続けた。その上、周りの者を気遣ってその心中の辛さを抑え一切表に出さずに闘い抜いた。鈴木君がチャラ男くんだなんてトンデモない。これがいかに的外れな認識であったことか。鈴木君は誰よりも「自由」を愛するストイックな真のエピキュリアンであったように思う。それはそれは見事な生き方であった。

もう10年くらい前だがこんなことがあった。鈴木メソッドでよく知られている長野県松本市の「鈴木鎮一記念館」へ立ち寄ったときのことである。ガラスケースに入った鈴木鎮一愛用のヴァイオリンと思しきものを眺めていると館長がよろしかったら弾いてみませんか、と声をかけてきたというのだ。もちろん、鈴木君はそのヴァイオリンを手にとり弾いたそう。この話を聞いて鈴木君の左顎がおたふく風邪のように膨らんでいることに初めて気がついた。彼のヴァイオリンは、ぼくの自慢のマジックより遥かに年季が入っており、そのレベルの違いを見せつけられたような気がした。音楽音痴のぼくに気遣ってか、ヴァイオリン演奏、クラシック音楽などのことを余り話題にしなかったのも、まったく気づいていなかったが、ここまでできるとは思いつけなかった。もう4年近く経ったが「国民文化祭・県民による第九演奏会(2013年8月25日)」において、音楽には一家言をもち一癖も二癖もある

オーケストラの団員を束ねるコンサートマスターとして「第九」の演奏会を成功裏に終え、またそのときの DVD を会葬御礼として自ら準備をしていたことを知り、彼がいかにヴァイオリン、ひいてはクラシック音楽に対する思入れが強かったかを思い知らされた。生前にもう少し音楽関連の話を書いておけばよかったと悔やまれる。

「第九」演奏の DVD を見ていると、ファーストヴァイオリンとして弾いているその雄姿に病気の影はまったく感じられず、DVD を見、聴きながら、ふと気がつくときぼくは上の空になっていて、もしこの時期に病院に行き検査していたらどうだったんだろうかなどと思っていたりするのだった。詮方ない、虚しいおもいであることは百も承知であるが、そう思わずにいられないのだ。

あの長い付き合いにおいて、ぼくは一度も自分の数学のことを彼に話したことがなかった。今回たまたまこのクラス会誌に載せていただいたぼくの論文を引用し高く評価してくれた物理系の論文を彼に見てもらいたくて、緩和病棟に入る直前の入院のとき、励ましの気持ちを込めて「少し元気になったら鈴木に見てもらって、褒めてもらいたいものがあるんだ」と枕もとで声をかけた。すると鈴木君は小さく頷き、しばらくすると突如手を差し出し、ぼくの手を強く握りしめ消え入りそうな声で「シュクいろいろ世話になったな、有難う」と言ったのである。そして同時に、スーッと一筋の涙が頬を伝わった。泣き虫のぼくは胸が詰まり「なに言ってんだ。世話になったのは俺の方だよ」と言うのが精一杯だった。励ましのつもりで声をかけたのだが、再び元気が戻ることはないと思っていた彼にとって辛い声かけだったのだろうか。心中を察するにしのびない。

昨年 4 月に突然鈴木君から誘いがあり、友人等 6 人で天神森の蕎麦処「菅原屋」を訪れた。案内された部屋は大きな桜の木の真正面で、ゆくりなくもこの世のものと思えぬほど見事な落花を楽しみながらの食事となった。鈴木君もこのところ食欲が低下していたそうだが、その日は珍しく一人前の蕎麦を完食した。

誰ひとり口にこそ出さなかったが、願わくば来年もこうして同じ季節に同じメンバーで同じ部屋から同じ桜の落花を愛でながら同じ蕎麦を食し他愛もない話に興じる、こんな時間がもてたらと、みな祈るような気持ちであった。

あれから一年、鈴木君は桜の開花を目前にして逝ってしまった。

コノサカヅキヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミツガシテオクレ

ハナニアラシノタトヘモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

もう鈴木君の杯に酒を注ぐことができなくなってしまった。

半年前に親友の河野拓人君を喪ない、また鈴木君を喪った。さびしくなるばかりである。